ONE PIECE～こちら特殊海兵課～

ロベル・アクベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ～こちら特殊海兵課～

【Ｎコード】
Ｎ５６０４Ｏ

【作者名】
ロベル・アクベル

【あらすじ】
これは、海賊から海を守る海軍に所属するちょっと変わった奴らの物語である。

～プロローグ～

時は、大海賊時代。
海賊王ゴールド・ロジャーが遺した伝説の大秘宝“ワンピース”。
その宝を目当てに、数々の海で無法者達が暴れ回っていた。
そんな海賊共を取り締まるのが、世界政府の直属戦力“海軍”である。

しかし、正義を司る海軍にも少しおかしな連中はいた。
彼らは余りにも個性に溢れ、己を出しまくる存在だったので、同僚や後輩に上司達の中で浮きまくっているのだ。

そこで、彼らをより有効活用する為に、変人変態海兵達を一カ所に固めた部隊が設立された。

その名は、“特殊海兵課”。
自称“エリート部隊”である。

ここは西の海のとある島、海賊達がアジトにしていた孤島であった。
しかし、その島を根城としていた海賊達は、その殆どが地に倒れている。
歴戦の海賊である彼らを倒したのは、一人の海兵であった。
「ふん……余り歯ごたえが無いな」
顔面を掴んでいた海賊を岩場に叩きつけ、最後の一人となった海賊を睨みつける。
睨まれた海賊は足をガクガクと震わし、虚勢を張りながら目の前に仁王立ちする海兵にカットラスを突きつけた。
「畜生ッ！！何なんだ貴様は！！
何で……何で……」
海賊は震える声で、海兵の頭のてっぺんから爪先まで視線を移す。
「何で、そんな格好をしてるんだァ！！」
その海兵は、鍛え抜かれた肉体を見せつけるかの如く上半身裸で、何故か知らないがネクタイだけはしっかりと締めていた。
そして、彼の一番のポイントは下半身である。
その中に納まっているブツのデカさが分かる程、ピチピチの海パン、

色は黒。

海兵は、それをさも当然のように履きこなしていた。

ちなみに、海軍は下っ端海兵には制服着用が義務づけられており、将校に昇進すれば正義コートと共に、制服の自由化が許されるのだ。

しかし、そんな自由な制服でも海パン一丁の海兵は、長年海賊をしてきた彼も見たことが無かった。

しかし、格好を指摘された海パン一丁海兵は自身の体を見回しつつ、首を傾げる。

何が変なのか理解出来ていないようであった。

それを隙と感じたのか、海賊は手にしたカットラスで海パン海兵に斬りかかる。

海兵は、その白刃を“武装色の覇気”を纏わせた小指で逸らし、海賊の顔面に裏拳を叩き込んだ。

鼻血を吹き出し、白目になって岩場に吹き飛ばされた海賊を横目で見つつ、海パン海兵はその海パンの中から電伝虫を取り出す。

そして、それに向かって報告をしていた。

「西の海、第５２支部へ。
こちら海パン大佐、潜伏中の海賊共を全員倒したので、すぐに捕獲の用意を」

彼の通称は海パン大佐、海軍の変人変態集団“特殊海兵課”の一員

である。

［了解！直ちに軍艦を向かわせますので、大佐もそちらで帰投を……］

電伝虫越しの海兵は任務成功の報告を聞き、安心しつつも海パン大佐に帰投の指示を出した。

しかし、彼はそれを断る。

「すまないが、同僚が迎えに来てくれたようだ。
それに乗って、本部へ帰るとする」

海パン大佐が言うや否や海面が盛り上がり、一隻の潜水艦が浮上した。

そして、その潜水艦のハッチから、今度は褌一丁で頭にやしの木のようなちょんまげを結った中年男が現れる。

「海パン大佐、迎えに来たぞ」

「申し訳ない、ドルフィン少将」

潜水艦から出てきた中年男はドルフィン少将、海パン大佐と同じく、特殊海兵課の構成員の一人であった。

海パン大佐はジャンプで潜水艦まで跳び、ハッチから内部へと搭乗する。

そして潜水艦は海へと潜り、“特殊海兵課”の本部がある海軍本部

要塞へと向かった。

～プロローグ～（後書き）

次回～特殊海兵課本部～

～特殊海兵課本部～

西の海のとある島を出航し、潜水艦は漆黒の深海を航行していた。

「それで？ドルフィン少将。
何故、わざわざあなたが迎えに？」

潜水艦内で窓から深海の風景を眺めつつ、海パン大佐が舵を取るドルフィン少将を見上げた。

少将は舵から手を離さず、口に加えたパイプから煙を吹き出し、答える。

「うむ、我が特殊海兵課の課長であるビート中将の目覚めが近づいている。
それに課長の目覚めの時期とは外すだろうが、白ひげとの最終決戦も近い。
どうやら、我々にもスクランブルが掛かったようなのだ」

海パン大佐は頷き、再び視線を窓の外に移した。

彼ら特殊海兵のトップであるビート中将とは、超人系“ゴロゴロの実”を食べた“グーたら人間”である。

本人は雷人間のゴロゴロだと思っていたらしいのだが、間違いでビート中将は真面目に働かない“グーたら人間”と化してしまったのだ。

しかし、そのお陰様で寿命までもがグーたらになってしまい、現在ビート中将は百九十歳である。
ちなみに、外見年齢は五十代だ。

彼の事は追々説明するとして、その“ゴロゴロの実”は食った人間をグーたらにする代わり、定期的に“目覚め”という時期を与える。

その時期に、能力者は今までグーたら過ごして溜めたエネルギーを解放する事が出来、“目覚め”の状態となったビート中将の力は、海軍本部の総戦力を上回るとまで言われていた。ただし、ビート中将の場合は五年サイクルで“目覚め”が現れるので、それまではただのグーたらオッサンである。
……その状態でも、やはり中将なので、戦力的には海パン大佐よりも遥かに上だが。

そして潜水艦は海軍本部のある島、マリンフォードへと到着した。

ドルフィン少将の潜水艦は、他の軍艦と違って湾内に停泊できないので、マリンフォード海底に専用のゲートがある。

そこから地下の“特殊海兵課”所有の潜水艦艦隊（ドルフィン少将の潜水艦しかないが、名目上は艦隊）のドッグへと繋がっているのだ。

ドッグ内は地下湾となっており、ゲートを抜けた潜水艦は浮上し、

接岸した。
潜水艦が湾に付くと、すぐさま搭乗用の階段が取り付けられる。
ドルフィン少将と海パン大佐は潜水艦のハッチを開け、階段を使って港に降り立った。
そこに、厳つい顔をした中年男性が駆け寄る。
二人の前に立つと、すぐさま敬礼して報告した。
「任務お疲れ様であります！少将、大佐！
他のメンバーの方々は皆、既に集まっております！」
この男も特殊海兵の一人であり、“鬼軍曹海兵”。本名ハートマンである。
彼は余りに部下をしごきすぎた為、尚且つ赤犬に匹敵する程の正義感を持つ男なので、“鬼軍曹海兵”として“特殊海兵課”にやって来たのだ。
ちなみに、実力的には大佐クラスなのだが、本人が軍曹がいいと言って聞かないので、軍曹のままであった。
ドルフィン少将と海パン大佐はハートマン軍曹に頷き返し、彼を伴って地下湾にある“特殊海兵課本部”へと向かう。

地下空間に作られたとは思えないほど、“特殊海兵課本部”は立派であった。
流石に地上の海軍本部要塞には負けるが、そこらの支部よりは立派だ。

最上階の十階にある会議室にて、十数名いる特殊海兵の臨時会議が行われている。

議長席に座るのは、ビート中将であった。
彼はピコピコハンマーを支えにし、早速会議室のデスクでうたた寝をしていた。

その次の席に座るのは、ドルフィン少将と海パン大佐、更には月光大佐という二人組の男である。

この四人は“特殊海兵課”設立当初の古参メンバーであり、通称“特殊海兵課の三羽烏”と呼ばれていた。
ちなみに、ビート中将は“三馬鹿”と呼んでいる。

その奥の席にはハートマンを含め、様々な特殊海兵が着席していた。

いびきをかいていたビート中将は、全員が着席したのを感じたのか、とろんと目を開くと、ピコピコハンマーを一発机に打ちつけ、会議開始の合図をする。

ピコンッというふざけた音と共に、ビート中将は話し出した。

「この野郎、会議を始めるぞ。
取りあえずは内乱地域に行って、三年くらい帰還していないバラライカ大尉以外は、揃ったな」

バラライカ大尉は“特殊海兵課”の紅一点なのだが、戦争大好きなため、ずっと内乱地域や激戦地区で軍事活動をしている戦争狂である。
まぁ、それが理由でこの課に在籍しているワケだが。

一応、月一の周期で生存報告と物資支援要請が来るので、生きてはいるらしい。

ビート中将は変態どもの顔を見渡し、議題へと入った。

「まず対白ひげ戦だが、俺も召集がかかってっから、最前線だ。
ウチの課は海軍の恥部の寄せ集めみてぇなモンだから、他の奴らは映像電伝虫に映らない所で戦えな。以上」

「応ッ！！」

全員が返答する。
この扱いには慣れている彼らなので、文句は出なかった。

ビート中将は軽く首を回し、言葉を続ける。

「俺はさっきも言った通り、最前線でやらねぇといけねェから、他の奴らの指揮はドルフィン少将に任せる」

「了解です」

パイプからリズムよく煙を噴き出し、返答したドルフィン少将。
「後はセンゴクの馬鹿野郎が出した作戦に従うだけなので、対白ひげの議題は終了だ。
次の議題に移るぞ」
ビート中将はガサゴソと書類を漁り、一枚の紙切れを引っ張り出す。
チラッと目を移し、内容を読んだ彼の顔に、不敵な笑みが浮かんだ。
「喜べ、今日から新人が入る事となった」
その言葉に、騒然となる会議室。
「新人！！どんな奴だ！！微笑みデブか！？
そびえ立つ糞野郎か！？」
新人という言葉を聞き、教官であったハートマン軍曹はテンションマックスとなった。
「黙りやがれ！この野郎！」
喧しい会議室に、ビート中将はどこからか取り出したホースを構え、喧しい連中に放水しまくる。
古参メンバーは雨合羽を常備しているので濡れないが、大多数のメンバーがびしょ濡れとなった。
ホースをまた何処かに仕舞い、ビート中将は会議を再開する。

「それじゃあ、出てきてもらおうか！
“特殊海兵課”期待の新人、人呼んで“普通少尉”！」
会議室の扉が開かれ、一人の青年が入室した。

～特殊海兵課本部～（後書き）

次回～究極の普通、それは特殊である～

～究極の普通、それは特殊～

俺の名前は、ノマル。
海軍本部所属の駆け出し少尉だ。

長い下積みを終え、やっと出向先が決まったと思ったんだが、その行き先が何と海軍一の変人部隊“特殊海兵課”だった。

一体、俺のどこが特殊なんだか……。

そして今日、この変態部隊に編成された俺は、早速噂の特殊海兵達が集まっている会議室へと通された。

「失礼します！本日より、“特殊海兵課”に編成されましたノマル少尉であります！
どうか、よろしくお願いいたします！！」

敬礼しつつ、ノマルは会議室の面々を見渡す。

そして、顔色を青くした。

海パン一丁とふんどし一丁の男はいるし、何故か女物のフリフリとした衣装を着たオッサン二人組もいる。
顔の怖いオッサンもいれば、顔は美少女なのに体はマッチマンな男

もいた。

……まぁ、確かに変人の集まりである。

その会議室の一番上座に座っている中年男性が、この変態集団を纏め上げている中将、ビートなのだと分かった。

「こっちに来い、馬鹿やろう！」

口癖なのか、馬鹿やろうと初対面の相手に言い放ち、手招きする。

ノマルは指示通り、ビート中将の隣へと立った。

その際、会議室の面々の後ろを通っていったのだが、皆訝しげに彼を見つめていた。

「ビート中将、彼のどこが特殊なので？」

そう挙手したのは、顔面美少女の筋肉マンだ。

彼は通称“美少女少佐”で、顔だけは稀代の美少女っぽい美少年なのだが、趣味は筋トレというギャップと顔と体のギャップの気持ち悪さから、この課に来た男である。

彼は去年この課に来たので、後輩が出来たのは嬉しいようだが、ノマルのどこが“特殊”なのか、イマイチ分からないようだった。

ビート中将はニヤニヤしつつ、説明する。

「さっきの紹介にあったように、コイツはノマル少尉だ。

……コイツの何処が特殊なのかと言うとだ」

ビート中将はもったいぶり、わざと溜めて話した。

「普通な所だ」

「……はァ！？」

その台詞に、会議室の変態集団とノマルは叫んだ。

ビート中将は全員を宥めるように両手を挙げ、静める。

そして、ノマルの書類を横目で見ながら話し出した。

「……海軍入隊テスト、実技筆記共に全て平均点ジャスト。
射撃、剣術、武術、全てが平均値ジャスト。
身長体重その他諸々のサイズも平均ジャスト。
実戦成績も平均値ジャスト。
彼女いない歴も平均値ジャスト。
態度、顔、振る舞いもお前らが見た通りの平均的な若者。……つまりはだ」

コホンと咳払い一つし、続けた。

「……コイツぁ究極の普通人間、何をやらせても平均ジャストを取る男。
だから“普通少尉”なんだ」

ビート中将がノマルのデータを全員に見せると、なる程と納得する。

ノマルすら、なる程と思った。

確かに、自分は何をやらせても平均的な事しか出来ない。
すごく良い事は出来ないが、かと言って悪いというわけでは無い。
下っ端時代は、上官から“平均値算出マシン”とまで言われたのだ。

「ま、つー事で、美少女少佐。
前々から後輩を欲しがってたろ？
しばらく、そいつのパートナーになることを命ずる」

ゲッ、と思ったノマル。

美少女少佐は、その美しい顔を嬉しそうに微笑ませ、そのマッスルな肉体を誇示するかの如くポージングをして答えた。

「了解しました！」

そして美少女少佐は席を立ち、ノマルの横に並ぶ。

「よろしくな！」

横に立たれ、初めて分かった事なのだが、この美少女少佐。身長が二メートル越えしていた。

あの顔でマッチョな巨体に近付かれると、確かに不気味である。

「むぐぐぐ！ビート中将！！
新人は私にまわして下さるのでは無かったのですか！」

ハートマン軍曹は不満のようだった。

すると、美少女少佐がノマルに耳打ちする。

「……鬼軍曹海兵の下に就くのだけは、止めた方が良いよ。あの人、大将赤犬に匹敵する怖さだからね」

ノマルは、ヒッと戦慄した。

海兵たる者、海軍本部最高戦力である三大将の事は当然知っているし、大将赤犬の強さや怖さ等は、それだけで有名なのだ。

「うるせぇなァ、ハートマン。良いだろ？別に……！？」

ビート中将がハートマンを宥めていると、急に室内に警戒警報らしきアラームが鳴り響く。

それを聞いた瞬間、特殊海兵達の顔つきが一気に変わり、真剣そのものとなった。

そしてビート中将含め、全員が一気に会議室を飛び出す。

「なっ……何ですか！？この事態は！？」

美少女少佐に抱えられて運ばれているノマルは、状況が飲み込めずに混乱していた。

美少女少佐はノマルをお姫様抱っこしながら、廊下を爆走し、答える。

「普通少尉！時計を見てみろ！！」

そう言われたノマルは、運ばれる揺れで手元がよく見えなかったが、今何時なのかはよく分かった。

何てったって、時計の二つある針が重なる時間帯、つまりはお昼の十二時だったので、ぶれる視界でも理解できた。

「昼飯だァ――――！！！」

雄叫びをあげ、この特殊海兵達が向かう先は、海軍本部内にある食堂。

特殊海兵課本部はマリンフォードの地下にあるので、地上の食堂まで階段を使って疾走せねばならないのだ。

「……もうヤダ、この部隊」

美少女少佐が階段を五段抜かしで走っているので、揺れがヒドいことになっていたが、そんな事よりも配属日早々、転属したいという願望が湧いてきたノマル。

～究極の普通、それは特殊～（後書き）

次回～初任務、特殊海兵の実力～

・オマケ

「よォッしゃァ――――！！！」

特殊海兵達が階段を駆け抜けた先は、何と男子トイレだった。

その手洗い場に設置された鏡が扉の様に開いている。

そこが、どうやら特殊海兵課の入り口らしい。

丁度、その時用を足していた海兵は変態集団がいきなり現れた事で、口をあんぐりと開けていた。

「急ぐぞ！普通少尉！

何せ、我々は食堂を使える時間帯が制限されているからな！！」

はぁ？と思ったノマルだったが、周りを併走する特殊海兵達を見て納得する。

こうして見ると海パン、フンドシ、女装、上半身裸の割合が非常に高かった。

まともなスーツを着ているのは、自分とビート中将とハートマン軍曹ぐらいなものである。

『……確かに、こんな奴らと並んで飯は食いたくないわな』

内心そう思いつつ、半ば諦めモードとなったノマル。

食堂では既に何名かの海兵達が食事をしていたのだが、雪崩れ込む特殊海兵達を見た瞬間、食べていた物を噴き出した。

「ぶふッ！あれが噂の特殊海兵かッ！！」

「ヒナ気持ち悪い！！」

そんな叫びを聞き、その気持ち悪い集団に自分も入った事を改めて痛感したノマル。

「……ふッ、もう死にたい」

その目は、死んだ魚のそれに酷似していたそうだ。

～初任務、特殊海兵の実力～

しばらくの間、コンビを組む事となったノマルと美少女少佐。
更に二人組の月光大佐は、現在とある王国へと来ていた。
大騒ぎした食事の後、早速ビート中将に渡された任務である。
内容は、その国が海賊に占領されたので、その海賊達を捕らえるなり殲滅するなりして、さっさと解放してやる事だった。

「さて、任務なワケだが……」

現在、時間帯は夜中である。
夜闇に紛れ、作戦を決行するのかと思ったら、急に月光大佐達が騒ぎ出した。

「ムーンライトッ！セットア～ップ！！」

先端に三日月状の物体が付いた玩具の杖を天に掲げ、月光大佐の片割れが叫ぶと、もう片方が垂れ幕とライトとカセットを取り出す。
叫んだ方の月光大佐が垂れ幕の中に入ると、片割れがカセットから音楽を流し、ライトで叫んだ方の月光大佐の影を垂れ幕に映し出した。

「……何してるんですか？」

動くシルエットを見る限り、着替えを行っているようだ。

「説明しよう！

月光大佐・聖羅無々は変身することで、様々な能力を得る事が出来るのだ！！」

どうやら、着替えている方の月光大佐は聖羅無々というらしい。

「ちなみに新入り君、私は月光大佐・美茄子だ。よろしく！！」

そう言うと、美茄子大佐も垂れ幕の中に入り、着替えを始めた。

唖然としているノマルに、美少女少佐が苦笑気味に語りかける。

「まぁ、気にするな。
直に慣れるさ」

それはそれで怖いのだが、そんな事はスルーされ、愉快なＢＧＭだけが流れていた。

しばらく待っていると着替えが終わったらしく、二人とも垂れ幕から出てくる。

その格好は、全身タイツのピッチピチなもので、腰には布みたいな物が巻かれていた。

「華麗な変身伊達じゃない！！」

聖羅無々大佐が叫ぶ。

「月のエナジー背中に浴びて！！」

今度は美茄子大佐が叫んだ。

「「正義のスティック、夜闇を切り裂く！！」」
二人同時に叫び、ポーズを取る。
「夜の任務なら任せて貰おう！月よりの使者、聖羅無々大佐、只今参上！！」
「同じく、美茄子大佐もよろしく！！」
ドーンと決まったが、ノマルの顔は蒼白だった。
何故なら……。
「おい、何だ貴様らは……」
早速海賊達に見っかったからです。
あれだけ騒げば、見つからない方がおかしいが。
周りを海賊達に囲まれ、銃や剣を突きつけられるノマル達。
「けっ、海兵かよ。
たった四人、しかも変態三人で何が出来るってんだ」
ニヤニヤ笑う海賊。
大体、百人はいるだろう。
が、月光大佐と美少女少佐は全く怖がっておらず、寧ろ面白そうに海賊達を見つめていた。

「うむ、では行くぞ美茄子！」

「応！聖羅無々！！」

月光大佐の二人が頷き合うと、急に聖羅無々のシルエットが歪み、その場から消える。

「なッ！？
一体、どこに……ガハッ！！」

聖羅無々大佐は、いつの間にか海賊達の後ろに回り込んでおり、手にしたスティックの月の飾り部分で、海賊達を斬っていた。

「説明しよう！
聖羅無々大佐は“コスコスの実”を食べたコスプレ人間！！
変身した衣装の前の持ち主の能力を得る事が出来るのだ！」

そして、聖羅無々が後を引き継ぐ。

「この衣装は、“キエキエの実”を食べた消失人間である“猫の目怪盗団”頭領の物。
よって、私は今“キエキエの実”の能力により、瞬間移動が可能となった！！」

スティックの月飾りは鋭利な短刀になっているようで、聖羅無々大佐は海賊の反撃を軽く避けつつ、一撃を急所に叩き込んだ。
「畜生！！コイツ、ふざけた格好の癖に強いぞ！！」

思わぬ反撃に、海賊達は焦る。
その海賊の顔面に、美少女少佐の拳がめり込んだ。

「ラヴ・ファンタジー！！」

美少女少佐の豪腕から放たれるパンチを喰らった海賊は、後ろにいた海賊達をも巻き込み、近くにある壁をぶち破る。

その壁は美少女少佐の拳圧で、ハート型の穴が出来ていた。

「……つ、強い！！」

思わず呟いたノマル。

格好や外見はふざけた奴らだが、その実力は海軍本部大佐や少佐に恥じない、いや、それ以上のものである。

「当然だ。特殊海兵とは、確かに海軍の鼻つまみ者の集まりだが、その戦力だけは折り紙付きよ」

美茄子大佐のスティックは鞭になっており、海賊達の手から武器を叩き落としたり、しなる鞭で海賊を吹き飛ばしていた。

「糞ッ！俺だって……」

傍観に徹するつもりは一切無いノマルは、刀を構え、海賊達へと突っ込む。

その戦闘能力は、前記の三名に比べると、実に平均的であった。

「はぁッ！！」

刀で海賊の腕を斬り、痛みで動きの鈍った隙を突き、その胴に回し

蹴りを叩き込む。
海賊はそのまま地面に仰向けに倒れ、戦闘不能となった。
「くッ……仕方ねぇ、こうなりゃ数で攻めるぞ！！」
かなり数を減らした海賊達だが、陣形を組み直したようで、じりじりとノマル達を取り囲んで行く。
ノマル達四人は背中合わせとなり、それぞれ海賊達を睨みつけていた。
「そこまでだ」
このまま戦闘続行かと思われたが、急にそんな声がしたので海賊達が振り向くと、彼ら目掛けてボコボコにされた人間が放り投げられる。
ドサッと受け止めた海賊がその人物の顔を覗くと、驚愕の声を上げた。
「せッ……船長！！」
彼はこの海賊団の船長であり、彼らが攻略したこの国の王宮で陣を構えていた筈である。
「既に、お前らの負けだ。
王宮はこちらで解放させてもらった。
それにしても、おかしいとは思わなかったのか？
たった四人で、こんな危険な任務をするなんて……」

建物の影からスッと現れたのは、海パン大佐であった。
その後ろには、多数の海兵達を引き連れている。

今回の作戦はノマル達四人が目立ちまくり、海賊達を引きつける。
そして海パン大佐の本隊が手薄となった王宮を攻め、人質となった王族や民衆を解放するといったものだった。

海賊達は月光大佐や美少女少佐の外見ばかりに注意がいき、肝心な所を見落としていたのである。

単純な手に引っ掛かった海賊達は、ガックリと肩を落として連行されていった。

「よくやった！ノマル！
作戦成功だな！！」

美少女少佐がノマル肩を叩き、労をねぎらう。

「あっ、はい。
ありがとうございます」

ノマルは陽動作戦の内容を聞いた時、単に逃げ回るだけだと思っていたので、特殊海兵がこれほどまでに強いとは想像できなかったので、若干唖然としたままであった。

「……案外、いい部隊かも」

ノマルがそう呟いた瞬間、急に海パン大佐の顔が恍惚に歪む。
それと同時に、変わった音が聞こえた。

［プルプル、プルプル］

電伝虫の呼び出し音なのだが、どこから響いているのかよく分からない。

しかし、それと海パン大佐の嬉しそうな顔を統合すると、余りよろしくない想像が浮かんできた。

海パン大佐は顔をほころばせ、ノマルに頼む。

「オォウッ！

すまない、ノマル。

私の海パンの中に仕舞った電伝虫が鳴っているのだが、代わりに取ってくれな……」

「絶対嫌ですッ！！！」

前言撤回、やはり変態部隊である。

～初任務、特殊海兵の実力～（後書き）

次回～特殊海兵紹介～

～特殊海兵紹介～

海軍の中でも、変人達が集められたという“特殊海兵課”。
その変人達の集団に、ごく普通の海兵が混じっていた。
彼の名前はノマル。
彼は中肉中背、顔立ちは良くも無ければ悪くも無いといった感じの、まさしく人類の平均を常に行く“普通少尉”として、この課に赴任したのである。

「初任務、ご苦労さんだな」

そんな彼の隣を歩くのは、ノマルより一年先輩の特殊海兵、美少女少佐であった。
彼は、顔立ちこそ美少女と見間違う程の美しさなのだが、その顔面の乗っかる胴体は、この世の全てのアスリートやボディビルダーが羨望の眼差しを向けるであろう筋肉ボディである。

「あぁ、はい。
美少女少佐もお疲れ様です」
美少女少佐はノマルの先輩兼パートナーとして、新人のノマルの世話を任されたのだった。
後輩が出来た嬉しさか、美少女少佐は顔をほころばせ、バシバシと

ノマルの肩を叩く。
その度、ノマルの頭が前へ後ろへと揺れるのだが、親愛を込めたものであったので、ノマルも悪い気はしなかった。
「そうだ。任務が終わったら、お前に特殊海兵課本部を案内しろとビート中将に言われてたな」
本部のある地下港を歩いている時、美少女少佐は、ふと思い出したように言う。
ノマルはまだ特殊海兵課本部については、何も知らないし、誰が所属しているのかもよく知らなかったのだ。
初任務も終え、しばらくは仕事も無いだろうと思った美少女少佐は、ノマルに本部を案内しようと提案した。
「そうですね、まだ俺も配属されたばかりですし、間取りや他の所属している方もよく知りませんから」
ノマルも丁度良い機会なので、この“特殊海兵課本部”について、よく知っておこうと考えた。
美少女少佐も頷くと、ノマルを伴って本部へと向かう。
「まずは、“特殊海兵課本部”について説明しよう」
ノマルは特殊海兵課本部を見上げるが、相変わらず立派な建造物であった。
「ここは我々特殊海兵が寄せ集められた課で、その目的は“手に余

る海兵を、より効果的に現場で用いる為”の部隊みたいなモンだな。
この本部ビルがある地下空間は、マリンフォード地下の海底に作られているんだ。
だから我々が地上に出る為には、前に使った階段か、ドルフィン少将の潜水艦を使うしか無いのさ。
勿論、非常時には緊急脱出機能もあるがな」

そうでなければ、非常時には皆仲良く海の藻屑である。

「でもホント、立派な建物ですよね」

「あぁ、お前も前に見ただろうが、我々特殊海兵は確かに外見は何だが、戦力的には海軍トップの部隊といっても過言じゃないんだ。
特殊海兵の任務は、ほぼ他の支部じゃ手に余る内容ばかりだからな。
かなりハードな任務だって回ってくるんだ。
だから、外観や設備が他の支部とは違うのさ」

自慢げに胸を張り、どや顔をする美少女少佐。
その胸板は盛り上がり、人の臀部のようであった。

美少女顔でその肉体を再び目に焼き付ける事となったノマルは、少し気分が悪くなりつつも、何とか笑って誤魔化すことが出来た。

「さて、今度は俺ら特殊海兵についてだな」

美少女少佐は特殊海兵課本部ビルに入り、廊下を歩きつつ、説明する。

「まずはこの俺、通称“美少女少佐”だ。
本名はブラウンだけどな。

一応、この課に来てから一年しか経っていないな。
この課に来た理由は、この美少女顔と筋肉ボディのギャップがキモいんだそうだ」
最後の言葉は不本意そうだが、改めて自己紹介をした。
「……何で、そんなに鍛えたんですか？」
ノマルの疑問に、美少女少佐は感慨深そうに天井を見上げる。
「……俺は、昔はこの顔に似合った痩せ形の優男だった。
それで、馬鹿にされたり女の子みたいと言われるのが嫌になってな。
で、鍛えたら……」
ググッと腕を曲げ、力こぶを見せつけた。
その太さは女性のウェスト並みである。
「こんなんになっちまったぜッ！！
ナハハハハッ！！」
あ、そうですかと高笑いする美少女少佐の笑い声を聞き流しつつ、
鍛えるのにも限度があるのではないかと思うノマル。
「さて、ここが特殊海兵の個室のあるフロアだ。
任務の無い時は、大抵ここでくつろいでいるか、鍛錬を積んでいるな」
最初聞いて驚いたのだが、特殊海兵には書類仕事の類が殆ど存在しないらしい。
何故なら、皆さん己の道を爆走する変人ばかりなので、ろくに書類

提出の期限を守らないし、この課自体が秘密らしいので、滅多な書類は回ってこないのだ。

「さて、じゃあまずは俺の部屋を見せてやろう」

そう言って、見たいとも言ってない部屋を見せられたが、美少女少佐の部屋はダンベルやサンドバックなどの鍛錬器具で埋め尽くされており、真ん中に申し訳なさげ程度にベッドがちょこんと設置されているだけという、意外と味気ない部屋であった。

「あぁ、お前の部屋は俺の隣な」

美少女少佐は自室の扉を閉めた後、隣の部屋を指差す。
確かに、その隣の扉には“普通少尉・ノマル”とネームプレートが打ち付けてあった。

「荷物はもう届いているだろうが、どうする？荷ほどきしとくか？」

美少女少佐は問うたが、ノマルは首を横に振る。

「いえ、大した荷物も無いですし、他の海兵の方とも会ってみたいですから、案内を続けてもらってもいいですか？」

「うむ、任せろ！！」

美少女少佐はよく通る声で言うと、再びノマルを伴って歩き出した。

「さて、まずは誰がいるかな……」

個室フロアをしばらく歩いていた二人だが、みんな任務に出ているようで、中々会えなかった。

ちなみに個室にいない時は、ドアノブの所に“外出中”というタグを掛けるのが規則らしいので、誰がいないのかは一目で分かる。どこかのホテルじゃあるまいし、と思いつつ、タグの掛かっていない部屋を探した。

「あぁ、海パン大佐はいらっしゃるみたいですね」

ノマルはタグの掛かっていない部屋を見つけたが、そこは海パン大佐の個室のようである。

「うむ、海パン大佐は特殊海兵課の古株の一人でな。ドルフィン少将や前に組んだ月光大佐と並んで、“特殊海兵課三羽烏”と言われている人だ」

「最初、会議室で見ました」

そして、ノマルは海パン大佐の扉をノックした。

しばらくして、海パン大佐がのそっと部屋から出て来る。

「何だ、普通少尉と美少女少佐か。何の用だ？」

ノマルは海パン大佐の格好を見て、目を見開いた。

何故なら、海パン大佐はトレードマークの海パンを履いておらず……つまり、全裸で現れたからだ。

「たッ……大佐、海パンの方はどうなされたのですか！？」

つい言葉遣いが丁寧になるが、単に見たくも無いモノを見せられ、恥ずかしいやら気持ち悪いやらで頭が混乱しているからだった。

「ん……？」

一方、海パン大佐は何を恥ずかしがられているのか理解できないといった感じで、自分の股間にぶら下がるブツを見つめる。

「……すまん、言い忘れてた。

海パン大佐は基本、休みは全裸でくつろいでるんだ」

美少女少佐は悪いことをしたような表情で、隣を歩くノマルを見下ろした。

あの後、結局挨拶だけして立ち去ったノマル達は、次の挨拶へと向かう。

「あぁ、そこはバラライカ大尉の部屋だ。

俺も会った事が無いんだけどな」

海パン大佐の隣にある部屋には、外出中の札がかかっていた。
明らかに何年も動かされていないのだろう。
埃が札に大量に付いていた。

「バラライカ大尉は、別名“戦争大尉”。
その通り名の通り、戦争好きの美女らしいんだ」

美少女少佐が言うには、彼女は二年か三年程激戦地区に行っており、
一年前に来た美少女少佐も会った事が無いのだ。

「多分、白ひげとの戦争時には帰ってくるだろう、とビート中将は
言っていたがな。
確率は、大将赤犬の微笑みを見るくらいらしい」

「……ほぼ無しって事ですか」

あの大将が微笑む場面など、想像が出来なかった。

「さて、その隣の部屋は……」

ノマルはバラライカ大尉の隣部屋の扉へと向かうが、慌てた様子で
美少女少佐がそれを止めようとする。

「だッ！駄目だッ！！
そっちへは行くな！！」

「……へ？何ですか？」

ノマルが美少女少佐に向き直ると、急に背中に寒気を感じた。

美少女少佐の顔も強張る。

ノマルがゆっくり、後ろを振り返ると、そこには……。

「おいおい、俺の部屋の前にホイホイと来ちまって良かったのかい？俺は上官だって構わずに食っちまう人間なんだぜ？」

そこには、青いつなぎを着た漢がいた。

体つきは美少女少佐よりは華奢だが、海パン大佐達のようにがっしりとしている。

顔の彫りも深く、所謂ウホッ、いい男であった。

だが、彼の自分を見つめる視線が怖い。

「ヤ、ヤラナイカ大尉……」

美少女少佐は顔を真っ青にし、青いつなぎの漢の名を言った。

何だかバラライカ大尉に似た通り名だが、一体何の特殊海兵なんだろうか。

「やらないか」

ヤラナイカ大尉はそう言うと、ノマルに迫った。

本能的に恐怖を感じたノマルは、後ずさる。

「や、やりませんッ！」

そう叫びながら後ろに下がるが、ヤラナイカ大尉の歩みは止まらなかった。

「とことん、悦ばせて……」

その手がノマルの肩を掴もうとした瞬間、二人の間に美少女少佐が割ってはいる。

ヤラナイカ大尉の手を払い、ノマルを庇う形となった。

「ヤラナイカ大尉、悪いが彼には指一本触れさせないぞ」

美少女少佐がそう凄むと、ヤラナイカ大尉は肩を竦める。

「やれやれ、折角好みの坊やが来たというのに……」

彼はそう言い残し、フロアから出て行った。

「……あの、彼は一体？」

ノマルは本能的な恐怖を感じたようで、足腰がガタガタと震えている。

「彼はヤラナイカ大尉、本名はアベ・タカカズ。

ホルホルの実を食べた“掘削人間”で、更には“男色の覇気”の持ち主……と言えば、分かるか？」

美少女少佐は、そう説明した。

なる程とノマルは納得するが、同時に美少女少佐を訝しげな瞳で見つめる。

その視線を受けた美少女少佐は、ムッとして反論した。

「勘違いするな。
我々は、至ってクリーンだ。
彼の趣味と言うか、好みは痩せ型の青年だからな。
そんな奴、ここにはお前くらいしか居ないんだよ」

ノマルは今まで見た特殊海兵を思い出したが、確かに痩せているのは自分と、強いて言うならば中年のハートマン軍曹ぐらいだろう。
後は、かなりのマッチョマンばかりだ。

「お前を会議室で見た時、あの場にいた全員の中では君を守ろう、と暗黙の了解があったのだよ」

強い変態軍団と思っていたが、この時だけは海パン大佐達に涙して感謝したノマルである。

「でも、あんな危ない方もいるんですね。
この特殊海兵課には」

ノマルがそう言うと、美少女少佐は、あぁと言った。

「そう言えば、お前は知らなかったな。
特殊海兵にはランク毎の区別があるんだ」

「へぇ……初耳です」

「例えば、うちの課長のビート中将は能力の副作用で仕事を殆どしない“プーさん中将”、お前は究極の普通人間“普通少尉”だ。
この二人は、他人に軽く迷惑や変わった感情を持たれるレベル“ス

テージ1”だ」
ステージ1、どうやら自分と課長はまだマトモな方らしい。
美少女少佐は続けた。
「で、“海パン大佐”や俺みたいな、生理的に受け付けないような奴が“ステージ2”と区分される」
彼の話だと、大半の特殊海兵はステージ2だそうだ。
「……で、最後のステージ3。
それは、例えば“鬼軍曹海兵”であるハートマン軍曹は部下の扱きすぎで、ここに飛ばされたのさ。
“バラライカ大尉”も、戦争好きでな。
かなりの危険思想の持ち主らしい。
“ヤラナイカ大尉”は、上官を……まぁ、喰ったり同僚と関係を持ったりしたから、ここに飛ばされたんだ。
つまりは、だ。
他人に実害を与えるレベル、それが“ステージ3”なのさ」
このステージ3は、かなり少ないらしい。
「まぁ、後は“お祭り中佐”とか“最弱准将”とかがいるけど、まだ会うか？」
ノマルは顔色が悪くなったようで、少し頭を押さえていた。
かなりヤラナイカ大尉が堪えたらしい。
「……すみません、やっぱり少し疲れたみたいです」

ノマルが正直に言うと、美少女少佐は頷いた。

「そだな。お前も俺も任務を終えたばかりだし、疲れたから今日はお開きにするか！」

ナハハ、と美少女少佐はノマルを連れ、自室へと帰る。

「……これから、よろしくお願いしますね。

美少女少佐“先輩”」

別れ際、ノマルが茶化すようにそう言うと、美少女少佐ははにかみつつ、早く寝ろと言い、部屋の扉を閉めた。

ノマルの特殊海兵としての生活は、今日から始まる。

～特殊海兵紹介～（後書き）

次回～戦争～

～おまけ、最弱准将現る～

ノマルが特殊海兵課の廊下を歩いていると、見知らぬ影が現れた。
室内だというのにヘルメットを頭に被り、赤っぽい服を着ていた男性だ。

隣を歩く美少女少佐が、あっと言う。

「……最弱准将」

「えッ！この人が！？」

ノマルが小さく叫ぶと、最弱准将はトコトコ近寄って来て、ピッと手を出してきた。

……握手、だろうか？

将官であるので、ノマルは敬礼をし、その手に応える。

美少女少佐が一瞬止めようとしたが、間に合わなかった。

ノマルが最弱准将の手を握った瞬間。

てってってれってれってれってれってれってって

そんなＢＧＭと共に、最弱准将は昇天した。

「最弱准将――！？」

と思ったら、いつの間にか目の前に復活している。

そしてそのまま、スタスタと歩き去ってしまった。

「……美少女少佐？」

意味が分からず、ノマルは美少女少佐に尋ねる。

「あの人は最弱准将。
その名の通り、そよ風で死ぬ人だ」

そう言った時、再びあのふざけたＢＧＭが聞こえた。
階段の段差につまづいたらしい。

「……どうやって准将になったんですかね？」

「……さぁな」

～戦争～

ノマルが特殊海兵課に配属され、しばらく経ったある日。

白ひげ海賊団二番隊隊長、ポートガス・D・エースの公開処刑が決まった。

それは、つまり白ひげ海賊団との全面戦争を意味しており、現在海軍本部では東西南北の海から名のある海兵達が次々と集結し、エース奪還を狙うであろう白ひげとの戦争に備えている。

「緊張を解くな！！
何が起きても、後三時間！！
そこで、全てが終わる！！！」

巨人族のジョン・ジャイアント中将の演説が海軍本部に響き、総勢十万名の海兵達が雄叫びをあげた。

「まったく、ジョン・ジャイアントの馬鹿やろう。
あんなに喧しく怒鳴ると、頭に響くじゃねぇか……」

ノマルの隣では、特殊海兵課の課長であるビート中将がピコピコハンマーで肩をピコピコ叩いている。
ビート中将は“ゴロゴロの実”のグーたらな能力により、年中眠たいそうだ。

「それにしても、我々はこんなに前線で戦うのですか」

海パン大佐が腕を組み、ビート中将に話しかけた。
中将は眠たそうに、返事をする。
「ふぁ……。
まぁ、映像電伝虫に映らねぇ位置は、ここらへんしかねぇからな」
現在、特殊海兵課のほぼ全ての戦力が待機していた。
海パン大佐、月光大佐達、美少女少佐、ノマル少尉などの構成員の全員が一カ所に配置されている。
他の海兵達はオリス広場に集結しているが、特殊海兵だけはマリンフォードを囲む軍艦の一隻に搭乗していた。
「全員、気をつけろよ。
白ひげの事だ、普通に正面から来るこたぁねぇぞ」
ビート中将がそう言うと、他の特殊海兵は、応と短く応える。
こうして、ノマルは初めての大規模戦闘に緊張しながらも、センゴク元帥のスピーチに衝撃を受けた。
「火拳のエースが、ゴールド・ロジャーの息子！！」
ついそう叫んでしまったのだが、ビート中将を含めた特殊海兵達は、どこ吹く風と聞き流している。
「まぁ、外見は似てねぇが、本質的にはロジャーに似てるよ。あのガキは」
ビート中将が目の前に広がる海を眺めつつ、そう呟いた。

その目は、昔を懐かしそうに思っているようだ。

「海賊王と戦った事があるのですか？」

ノマルがそう尋ねるとビート中将は、あぁと答える。

「アイツとはガープ程ではないが、何度となく殺し合った仲さ。オイラの“目覚め”を使っても止めれなかったからな、ロジャー海賊団は」

美少女少佐から聞いたのだが、ビート中将は“目覚め”の時期に海賊王を一回だけ半殺しにしたらしいのだが、トドメを刺そうとした瞬間に嵐に見舞われ、逃がしてしまったのだった。

「ま、ガープの馬鹿やろうがコソコソ匿ってんのには気付いていたがな。

Dはいつでも時代を変える……やはり、血は争えねぇみたいだな」

ビート中将はニヤリと笑うと、その場に胡座をかいて座り込む。

その時の中将の目は軽く見開かれており、普段のヘラヘラした中年の纏う呑気なオーラではなく、最強クラスの海兵の気迫が漂っていた。

「……来たか」

ビート中将が呟く。

ノマルもビート中将の視線を追い、海にかかる乳白色の霧に目を凝らした。

「なッ……！！」

濃い霧を抜け、現れたのは白ひげ傘下の四十三隻の海賊大艦隊。
その海賊旗に掲げられたマークは違えども、その目的はたった一つの猛者達。

真っ直ぐ、海軍本部へと船首を向けていた。

海パン大佐は電伝虫で、海中の潜水艦で待機しているドルフィン少将に連絡する。

「敵が来た。通達があり次第、モビーディック号を魚雷で沈め……」

そうドルフィン少将に通達していたのだが、少将から返事が無い。

『……白ひげなら、来ている』

海パン大佐が呼び掛けようとしたら、ドルフィン少将はポツンと呟いた。
その声色は珍しく、焦りの色が含まれている。

『あいつら、コーティング船で海底を進んでいる！！
こちらも見つかって砲撃を喰らった！一旦浮上する！！』

その瞬間、マリンフォードの湾内から白く塗られた鯨を船首にあしらった巨大な船。
モビーディック号が浮上した。
次いで、三隻の白ひげ海賊団の船も浮上する。

「ドルフィン少将！無事か！！」

海パン大佐が電伝虫に声を荒げ、呼び掛けると、ノマル達が待機する軍艦の真横にドルフィン少将の潜水艦が浮上して来た。
その船体には、幾つか傷が見られる。

浮上した潜水艦のハッチが開き、ドルフィン少将が飛び出して、軍艦の甲板に着地した。

「怪我は無いが、流石に一隻ではあの船は落とせないな」

何とか逃げてきたようで、少し冷や汗をかいている。

「良かった、無事で」

ノマルもホッと一息ついたが、すぐに顔つきを真剣なものへと変えた。

戦争は、まだ始まってもいないのだ。
安心は出来ない。

すると白ひげがモビーディックの船首に現れ、何か話したようだが、こちらには聞こえなかった。

「あれが、伝説の海賊……」

ノマルから見えるのは五メートルはあろうかという後ろ姿だけだが、それだけでもノマルを怖じ気づかせるには十分な程のオーラだ。

すると、白ひげはその鍛え抜かれた腕を交差させ、力を込めて大気を殴りつける。

まるで爆弾が爆発したような轟音が響き渡り、大気にヒビが入る。
更に、そのヒビから空間が歪み、海軍本部の左右の海へと海面を押し上げながら進んで行った。
歪みが水平線の彼方へと消えた後、辺りは静寂に包まれる。
広場に集まる海兵達が動揺する中、ノマル以外の特殊海兵達は身じろぎ一つしなかった。
ビート中将はのっそりと立ち上がり、歪みが消えた左右を見つめる。
「……さてと、戦争を始めっとするか」
軽く首を回し、薄く笑った。
ノマルはその気迫に薄気味悪さを感じつつ、少し他の特殊海兵に目を移す事にする。
組んだ事のある海パン大佐達やドルフィン少将、美少女少佐が教えてくれた人物以外にも、結構な数の特殊海兵が待機していた。
……ゴツい海兵に担がれたワの国の神輿の上で仁王立ちするのは、恐らくはお祭り中佐だろう。
先程から担ぐ海兵達が神輿を揺らし、ソイヤソイヤと喚いている。
担ぐ海兵やお祭り中佐を含めて、その半纏とふんどし姿は到底海兵には見えない。

最弱准将、本名スペランカーも甲板で待機していた。
一体、彼が戦争で何の役に立つのだろう。
ハートマン軍曹などは、ファック！ファック！と騒がしく叫んでいる。
周りを見ると、特殊海兵達は異様にテンションが高かった。
広場に集まる海兵達は緊張した面もちで白ひげ達と対峙しているのに、特殊海兵だけはドンチャカわめき散らす。
「……こんなんでいいのですか？ビート中将」
「うちの課は、テンションが第一の部隊だからな。いつもこうだよ」
中将は慣れっこらしく、むしろ自分もコマネチ！コマネチ！と叫んでいた。
しばらくこの状態が続いたのだが、海軍本部を低く響く地鳴りが揺らす。
そして、先程白ひげの出した歪みが消えた左右から……。
「な……な！！」
ノマルは口をあんぐりと開け、空を見上げた。
左右から、巨大な津波が押し寄せていた。
恐怖、勇気、意志、様々な感情を表す叫びが合わさり、今、戦争が

始まる。

～戦争～（後書き）

次回～戦争の中で～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5604o/

ONE PIECE～こちら特殊海兵課～

2010年11月29日07時13分発行